
とある右腕の特殊装甲

神戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある右腕の特殊装甲

【Nコード】

N3947M

【作者名】

神戒

【あらすじ】

スクライドのアルター使い

禁書目録の能力者

その他様々な作品のキャラが、学園都市を舞台に登場し、暴れまわります。

メジャー作品の能力者がこぞって出ます。

しかし主人公はシェルブリッドのカズマ。

出来る限りシリアスにならぬよう、明るく行こうと思います。

序章 ネイティブアルターの少年のお話

「——わたしは、夢を見ていたんです」

そこはフワリと身体が浮かび上がる、無重力空間。しかしそれは正確な表現ではないだろう。そもそもそこには重力と言う概念がなく、身体が存在せず、意識だけがただ無防備に投げ出される、所謂^{いわゆる}精神世界であった。

「夢の中のその人は、とても荒々しく、とても傷ついていて苦しそうでした」

なんの危険性も無い夢の中。ただ言葉だけが浸透する無色透明のその空間。不思議と心が落ち着き、時間の流れも感じず、また気になることは永久に無いと思われる程、そこは心地よかった。

彼女の思考は世界に漏れる。だが、それを知覚できるのは彼女のみであるために、問題性は皆無を極めていた。

「しかしその瞳に浮かぶ闘志は決して消えず、揺らぎません。力強い拳は、不器用に大切な人を護っていました」

「ああ——わたしは、見続けているのです。荒々しく、激しく、雄雄しい夢を……」

彼女の意識は、ごく自然的にプツリと途絶えた。まるで儚い蜘蛛の糸の如く、だがそれは当たり前のように消えて——同時に世界は消失した。

「助けてえええっ！ 僕の、スーパーピンクラッシュアアアッ！」

——先日起こった激しい戦闘にて対峙する、特殊警察内に設立された『アルター能力者』で構成されているHOLY部隊隊員はそう叫び、能力を発動させた。

巨大な人型のロボットが空から舞い降りる。力強い腕に、頼もし

い表情。陸橋にそれが降り立つと、激しい振動に橋が波打った。

それは驚くほどの力を持ち、その強靱さは計り知れぬほどであった。凄まじい勢いがあった。激しい攻撃の数々だった。その力、特殊能力^{アルター}さえ有れば敵さえも粉碎微塵であると思われた――が。

「もつとだ、もつと！ もつと輝けええッ！」

不意に、敵アルター使いの、右腕に特殊装甲を装備する形式のアルターが光り輝き始める。

拳をより強靱に、隙間無く装甲で埋め尽くし、その背には三枚の羽を作り出し、羽を消費することに全てを打ち破る必殺の拳を繰り出す――それだけの能力だった、筈である。彼の特殊能力^{アルター}はそれのみしか、確認されていなかった。

事実、彼の能力はつい数日前まではHOLYが確認したままの能力であり、威力であり、程度だったのだが、アルター結晶体と呼ばれる、アルター粒子を結晶化させ身体を構成させている”向こう側の世界”から現れた存在と出会い、拳を交わし、その背骨を分解、吸収し、彼は更なる力を手に入れた。

アルター結晶体の委細は不明、出現場所もランダムであり、その存在の特定は困難を極めている。

そして巨大ロボット型アルターである『スーパーピンチクラッシャー』^{アルター}はあえなく、右腕の特殊装甲に敗れてしまった――。

――現在より二三年前、神奈川県の一部、横浜を中心として大災害が起こった。それは自然現象では到底ありえない程のエネルギーが放出され、大地に隆起を発生させるといった事象であり――その結果、首都圏全域の機能は停止し、政治、経済も長期に渡る停滞を余儀なくされた。大災害の中心である横浜は、隆起が起こった大地とともに本州から離れ孤島へと変わり『ロストグラウンド』と、そう呼ばれるようになっていた。

その五年後、余力ができ復興した日本政府や国連からの援助によりロストグラウンドは復興するも、復興した市街の住民と、崩落地区の住民『インナー』と呼ばれる特殊な二層社会が生まれた。

そして『大隆起現象』から八年後、日本においての完全な完全独立自治領と認定された。

さらにロストグラウンド内で確認された事では、”ロストグラウンドで生まれた新生児の約5%がアルター能力と呼ばれる特殊能力を持っている”という事である。

彼らは全般に『アルター使い』や『アルター能力者』、『ネイティブアルター』と呼称され、その中でも特に暴力や略奪を行う一部は『アルター犯罪者』と呼ばれるようになった。

これに対して本土側は、武装特殊警察『HOLD』内に、アルター能力者のみで構成する特殊部隊『HOLY』設立し、対応に当たさせた。

ここで挙げられた『アルター』とは、正式名称を『精神感应性物質変換能力』と呼ばれ、自身の意思、精神力により周囲の生物以外の物質を原子レベルで分解し、各々の特殊能力形態へと再構築する事が出来る特殊能力である。

余談であるが、アルターを構成する際に噴出する特殊粒子を、主に『アルター粒子』と呼んでいる。

また一部の強力なアルター使いは、相手のアルター物質を分解し自らのアルターへ再構築させたり、破壊された部分を再構築する、再々構築を行う事が出来る。

このロストグラウンド内での新生児にのみ発現するアルター能力の件数は確認されて以降、その数値を年々増加させている模様。

——HOLD作成：ロストグラウンドの概要——より抜粋。

「——はあ？」

カズマと呼ばれる少年は、そんな間抜けに聞き返す言葉をだだっぴろくも誰もが精を出して大地を耕す農場にて上げていた。

それに相対する同年代らしき少年は、「だーかーらー」と幾度目かになる説明を開始した。

「本土に学園都市つー能力者を開発する機関があんだよ。実はそこにあやせさん達が捕まってる”かも”知れない。その救出に俺がお前に仕事を依頼する……という話だ。わかんねーのか？」

苛立つ少年——君島と呼ばれる彼は、その表情をしかめて握りこぶしを作り、次理解できなければその拳を振りかぶらんとする勢いで捲くし立てていた。が、カズマはまだ理解できないのか、ズボンのポケットに両手をつっ込んだまま、とぼけたような顔で君島を見ていた。

半眼に開く瞳はやる気を見せず、だからこそ君島をさらに激昂させるのだが——。

「おおい！ さぼってんじゃねーぞ！」

「働けっ！」

遠くから響く、安全第一と書かれた黄色のヘルメットを被る、筋肉を隆々とさせて衣服に浮かび上がらせている男たちが声を荒げる。穏やかさを信条としていない彼らは、常に語気が荒くなっていた。

「はいっ！ 頑張りましょー、はい！」

そして、そんな男たちの声が耳に届くと同時に、だらけた姿勢のカズマは背筋を伸ばし、目をしっかりと見開いてクワを振り上げた。ざくつと、少しばかり柔い地面にクワが突き刺さり音が鳴る。彼は作業を片手間に、ようやく君島へと返答した。

「ホーリーに対抗しようとした俺らが馬鹿だったとかなんとか、お前、言ってなかったっけ」

そう言ってカズマは悪戯の口の端を吊り上げた。君島はその直後、怒りを募らせたカズマに怒鳴られ胸倉を掴まれたのを思い出して、思わず苦笑し、そして自身の言葉の軽さに思わず赤面した。

カズマはクワを振り上げる。君島は言葉を返した。

「愚痴ってるだけじゃ何にも始まんねえからな。ちゃんと学園都市までの足は作っておくし、前金も——ホラ」

横目に見る君島は、何かジャケットの中をまさぐっているようだった。カズマはそこで手を止め彼を見ると、その顔は緩みに緩みまくっていて、まるで地上に落ちたクラゲの如くであった。ダルダルである。

彼がジャケットの内ポケットから出したのは——分厚い紙の束。カズマは、どうせ君島の事だから上と下の数枚だけが紙幣で、他はただの紙くずだと疑った。故に彼はその束を君島の手から奪い取って、パラパラと中身を流し見ると——。

カズマの表情が、驚きに染まる。君島は嬉しそうに、先ほどの決意や、思い出していた悔しさなんてものは最初から無かったような打って変わった笑顔で口を開いた。

「これで前金さ。勿論、俺の取り分を抜いてある。コイツはぜえーんぶ、かつずま君のモノだよ」

——それ以降、彼らは口を一切利かずに、その場を後にする。

決断は恐ろしいと感じるほど早く、行動は驚きを隠せないほど迅速であった。

筋肉を膨張させる男たちが、カズマが逃げたと認識できたのは『旅にデマス』と書き残された紙のお陰であり——カズマの保護者たる少女は、苦笑し、そして慌てた様子で家へと駆け出した。

その場は怒号に包まれた。

「もうっ、カズくんまたどこかに行っちゃうの!？」

全速力で駆け出したお陰か、彼女は半ば廃墟と化している自宅から出て行くカズマの姿を捉える事ができた。

「おう、かなみ」

カズマは乗り掛ける車から離れ、かなみと呼んだ、まだ年端も行かぬ少女へと歩み寄る。彼女は精一杯に駆け出して、呼吸を乱しながら膝に手をやり、中腰体勢のまま言葉を続ける。

「おう！　じゃないよ、またお仕事サボってえ」

「悪い悪い。っと、ホラよ」

顔を真っ赤にして怒るかなみに対して、全く反省の色を見せない彼は、ポケットから、先ほど君島から受け取った札の束を差し出した。

「旨いモンでも喰ってて待つてろつて。なあ？」

「でもカズくん、また怪我とかしてきちゃ嫌だよ？」

金を受け取るかなみが肯定した態度に出るのは、目先の資金に目がくらんだからと言うわけではない。最早彼を止めるすべは無いと理解しているからであり、だがそれでも彼が行く事に了承しきれぬ心が、そう口にさせていた。

すると、気がつくとかズマの隣に立っていた君島が、朗らかな笑みを浮かべながらかなみの頭を軽くなで——カズマにその手を、力強く引き剥がされた。

君島は冗談交じりの謝罪をした後、ようやくかなみへと口を開く。「安心してよかなみちゃん、コイツが今まで、相手に怪我をさせても自分が怪我を負って帰ってきたことってあるかい？」

「……割と」

「だつよなあ」。おいカズマア、あんまかなみちゃんを心配させんじゃねーよ」

頬を膨らませて頷くかなみに肯定する君島は、会話の矛先を隣に立つカズマへと向ける。

カズマは面倒そうに後頭部あたまを掻くと、

「わーってるよ、怪我してこなきやいいんだろ？」

「うん」

「そーそー、カズマくんは聞き覚えが良く——」

次いで、その手は拳骨となって君島の頭頂部へと振り落とされた。

ごつんと言つ鈍い音が鳴る。妙に痛々しい音にかなみが声を上げそうになると、君島はそれを遮るように、頭を抑えながらカズマに食つて掛かった。

「痛つてえ〜じゃねえかよ！」

隣に顔を向けると、既に彼の姿は失せていた。君島は唸りながら振り返ると、カズマは彼よりも早く彼の愛車に乗り込もうとしている最中であつた。

納得がいかないような複雑な心情を抱えながら、君島は表情を入れ替え笑顔で片手を挙げ、かなみに振り返る。

「じゃね、かなみちゃん」

「は、はい」

かなみは虚を突かれたようにどもつて、彼らが車に乗り込むのを眺めていた。

君島が車に乗り込むと、すぐさまエンジンが機械的な唸り声を上げ、四輪は荒野の上で空転する。砂埃が上がる中、フルスロットルで踏み込まれたアクセルはその通りの速度を上げ、瞬く間にかなみの横を通り過ぎていった。

砂煙が上がる。風がそれをいつものように掻き消して行つて——かなみは小さくくしゃみをしてから、カズマから受け取った大金を廃墟の自宅の、所定の隠し場所へと隠してから、また農場へと戻つていった。

第一章 能力者は高台に降り立つ

「宇宙船じゃねーかつ」

カズマが、宙に浮かぶ巨大で厳つくゴツイ装甲に身を包んでいる戦艦らしき”何か”を見上げて叫んだ。

そこは市街から最も離れた、海が見える崖付近の荒野。風が吹くとちよつとした砂塵が上がる、渴ききつた場所である。

「カッコいいだろう」

次いで、全身を黒にそめ長髪を、ワラを纏めるようにし二つに分ける髪形をする、明らかに人間ではない何かが返答する。現在の状況が一体何がどうなっているのか、ただ連れて来られただけのカズマは理解し得ない。

——彼はその名を『ギヤラン・ドゥ』であると自己紹介していた。その風貌は、以前背骨をへし折った『アルター結晶体』に似ていなくとも無いが、彼は喋る知能を持っているのでアルターではないようである。人間でもないところを見ると、恐らく狂科学者^{マッドサイエンティスト}によつて悲惨な実験体生活を余儀なくされていたのだらうと思うが、底抜けの明るさ、もとい間抜けさを見れば同情のし甲斐もなさそうなものだ。

にやりと笑い、白い歯がきらりと煌めく。君島は横でニヤニヤと笑っているので、カズマは自分が受けた仕事が本当に”本土に送られたネイティブアルターの奪還”なのか少しばかり不安になつてきた。いくら何でも仕事は受け付ける稼業についているとはいえ、嘘をつかれてはたまつたものではない。

最も、君島に限ってそうすることは無いと思われるのだが……。

「コイツは『時間』と『空間』を超越し全く異なる世界、いわゆる『別世界』^{パラレルワールド}へ送る事が出来る。おつとその間抜け面のバカ男、本当にそこにアルター能力者が送られたのか疑問に思つたな？ ソイツは間違いが無い、何故ならこの装置を使って送つたのだからなア

ッ！」

まるで間近で砲撃訓練が行われているのかと誤認するくらい、その声はやかましく耳を通り脳内に響き渡った。カズマは五月蠅そうに耳に手をやると、君島はすかさず解説を始めた。

「ホーリーはどうやら能力者だけを集めた都市を作ってるみてーなんだ。そこに、あやせさん達も連れてかれたって訳。それでコイツ、ギヤランⅡドウの話によれば、他の『別世界』パラレルワールドからも、いろいろな能力者が集められているらしい、と。そーゆー訳」

「おいおいおいおい、ちょっと待てって。なんだその……、ぱ、パラ……」

「パラレルワールドだッ！」

「っせーな。そのパラレルワールドっつーのは、なんだ、わけわからねーよ。本土よりもっと外の世界ってコトか？」

「パラレルワールドっつってんだろーがお馬鹿さまがッ！」

凄まじい覇気が怒声に変換されて脳を冒す。カズマは耐え切れなくなつて、ギヤランⅡドウに対峙した。彼は偉そうに腕を組んで、まるで蟻が這つて近寄ってきたような——酷く興味のなさそうな顔でカズマを見返した。

「いちいちうるせーんだよッ！ ふざけんな、なにがパラレルワールドだッ！」

「真剣ですがア。御託はイイからさっさと行けッ！」

荒野の大地の一部が消失し、半円に掘られたような穴の、その断面を極彩色に染め上げる。科学色が濃いその色はアルターを構成するために分解された事を現わして——だが、

「悔しいけれどオ、俺に夢中かア——ギヤランⅡドウ」

リズムに合わせて踊りだすギヤランⅡドウの拳が、カズマが右腕のアルターを作り出すよりも早く、その横腹に到達する。

激しい衝撃が全身を襲い、足元は一瞬にして消えてなくなる。浮かび上がった身体はまるで意思を持つように宇宙船、もとい『次元転送機』の真下へ流れに流れ、

「照射だッ！」

ギランⅡドウが叫ぶと同時に、カズマ目掛けて転送機械のレンズから光が柱となって降り注ぎ始めた。そして為すすべもなくカズマは光に包まれる。予想していた衝撃は一切無く、凄まじい光によって一瞬にして景色が揺らいだかと思うと――。

「消えた……？」

光の中に消えたカズマは、光が失せると既にその中には存在していなかった。気配も無く、逃げ出した様子も無い。

本当に、ギランⅡドウの言うとおりカズマは『別世界』へと送り出されたようであった。

「この俺が失敗するはずがねェだろーがッ！」

「でもよー。コイツはお前の目的でもあるんだろ……？ 全世界アルター化――」

君島が恐る恐る、その親しみやすくも常に心臓がすくみ上がるような威圧を放つ男へと、声を掛ける。だがその最中で彼と眼があつて、不意に言葉は虚空に解けた。

「それ以上言うのは、野暮つてもんだろオ――君島ア」

本土側、ロストグラウンドのホーリー、そしてネイティブアルタ―と――この次元と並列して存在する別世界。その全てと繋がる男の実力は計り知れず、またどうやればこの『次元転送機』であり『タイムマシーン』ともなる機械を作り出せるのか。君島は疑問すぎて頭痛を引き起こし、ギランⅡドウに対して非常に強い興味を抱いた。

が、既に依頼料は支払っていて、目的も完遂した。彼らの関係は此处で終え、これ以上ギランⅡドウに付きまとう理由は無い。君島は仕方なく踵を返し、ギランⅡドウへと背を向けると、

「まア、待てよ」

不意にそう声を掛けられた。君島はなんだろうかと思い、またギランⅡドウの妙な発言を浴びせられるのかと警戒して振り返る。靴底が地面をすり、薄く砂煙を上げた。

ギヤラン「ドウへと向き直ると突然、何か黒い物体が視界に飛び込んだ。それは山なりに投げられていて、君島が手を出すとそれは胸元に落ちた。

それは長方形の箱であり、表面はプラスチック、そしてその表には細かく穴が空いていて——どうやらスピーカーが内蔵されているらしい。その箱の上側にはアンテナらしき棒が立っていて——見る限り、君島の知識を搾り出して考えるとそれは、『無線機』らしかった。

「殴り飛ばす瞬間、奴のポケットに同じものを突っ込んだ。丁寧な説明書付きだ。『空間』と『時間』を超越して連絡を取る事が出来る唯一の装置だが——まだ未完成で、三度までしか連絡を取り合うことできない。向こうの世界で目的を達成すれば連絡がつくだろう。そうしたら、俺に連絡しろ。帰らせてやる」

続いて、何か紙面らしきものが風に乗って送られた。君島が質問を投げるより早くそれはやってきて、彼は慌ててそれを受け取った。「なアに、高々数人、十数人世界から減るだけだ。俺には関係ない——さらばだ」

そして唐突にそう告げると、彼は背を向ける。口元はこれまでに無いくらいいつりあがっていて、大きく口を開いて「照射」と叫ぶと、また一瞬にして次元転送機より光が放たれた。

再び凄まじい光が当たりを包み——気がつくと、今度は転送機ごと、ギヤラン「ドウは消えうせていた。

「……わけわかんねー奴」

君島はなんだか、非常に現実離れた現象を味わったような消化不良を起こして、後頭部を掻きながら愛車へと戻っていった。

ギヤラン「ドウ、それはあまりにも『アルター結晶体』に似すぎている。確信は出来ぬものの、そう考えていても損は無い。恐らく彼自身、あの機械を使用してこの世界——彼から見た、アルターという共通点を持つ『別世界』^{パラレルワールド}にやってきたのだろう。

恐らく、アルターを極めて単体で行動し、思考し、喋る事が出来

るようになったのだ。そして空間か時間か、そのどちらか、あるいは両方を操作できる能力を持ち、また純粋な格闘能力もカズマ以上であろう。

そして、彼は自分の世界に無い何かを探してこの世界に来て、また別世界を旅している。だから、ホーリーに捕まったあやせ達を救出する事を手助けすることともいえない。理由は、そういった目的を持つものが居るから。拒む理由など、最初から無いのだ。

ギャラン・ドゥの目的こそが、恐らく能力者のみで構成された世界の構築。そのためにはあらゆる物を利用する——自分で全てをやってしまうカズマとは正反対の性格だと、君島は思った。

君島は一つ息を吐いて、愛車に乗り込む。それから鼻を掠める砂塵に、大きくくしゃみをした。

「不幸だーっ！」

——気がつくとその日は炎天下の下。なにやら木製のベンチに横たわる自分の身体は若干鈍く、だが不意に聞こえたそんな叫びに意識は否応にも覚醒する。

どこだろうか、ここは——ああ、そういえば、ぱ……パレ……なんとかつつ……。――

思い出したかと俄かに納得しかける脳が、はつきりと思い出せない名称に対して疑念を抱いた。自分は何も思い出していない。なにやら記憶が混濁しているのだ。本土とは……関係ない、もつと別の場所らしいとは、なんとなく理解している。説明しろといわれれば無論、何もいえないのではあるが。

「つたく、うつせーな」

カズマはベンチから身体を起こす。靴底が地面を叩くと、そこは軽い音を鳴らした。砂や土ではなくもつと硬く確かな大地——市街を彷彿とさせる人造^{コンクリート}石が、地面を固めていた。

なるほど、どうやらロストグラウンドではないらしい。カズマは

徐々に状況を把握していく。さながら成長性の高いスタンドの如くであった。

炎天下の中仰向けに寝ていても、景色が正常に目に映るのは長い間寝ていた、というわけではないからであろう。つまり、横たわっていたのは一分にも満たない。そう考えてまず間違いは無いはずだ。ともかく、ここが何処なのか情報収集しなければならぬだろう――。

そう思って立ち上がったとき、カズマは思わず息を呑んだ。言葉を、失った。

――カズマが居る場所は、街を見通せるちよつとした高台らしき場所。そこから見る景色は、市街を越える、ハイテクノロジーを使用しているらしかった。

立ち並ぶ高層ビルに、だが息苦しさを感じさせない広い道路。空を穏やかに泳ぐ飛行船は、何か企業の新商品の宣伝をしているらしく、その腹部分には映像を流し続けている。

そんな市街よりもより機械的な街であるが、見上げる空は澄んでいて嫌な感じはしない。カズマは気がつく、転落防止用の柵に手をついて、街を一望した後――。

「つまんねえ所だな……」

視界の端をうろちよるする円柱形のゴミ箱を逆さにしたような機械――清掃ロボットを捉えながら、大きく息を吐いた。

争いの無い、平和な世界。

一度君島が、冗談か本気が、愚痴っぽく言っていたのを思い出す。

『あゝあ、オレも本土で生まれたかったなあゝ』

確かに、本土ならばまともな生活を送れることが可能であり――
そもそも、本土ではまともな生活こそが基本なのだ。ロストケラウンド無法地帯とは全く逆の土地。世界が違うと言っても過言ではない。

だがカズマは首を振る。この生まれて持った特殊能力アルターは何のためモノか。そして、彼はあまりにも、争いに慣れ過ぎてしまった。

『冗談じゃねえ、あんなトコ、退屈すぎて死んじまうぜ』

——ここは、その本土を超越した場所であるらしい。カズマは無意識にそう理解した。

ならば、平和を極めたこの場所ならば、退屈どころではない。持つて生まれたアルターの意味すら導き出せないこんな土地には、長居する必要は無いだろう。だとすれば、さっさと仕事をこなして……。

大きく息を吐いて目的を完遂させようと行動に出始めては見るが、早速その足は、振り向いた途端に止まってしまう。それはなぜか、答えは簡単、そして瞭然。

ホーリーに捕獲されたネイティブアルターの所在を、カズマは知らなかった。

「——んだよビリビリっ！ 一体全体俺が何をしましたかあっ！？」
ここが見知らぬ土地である以上、それは振り出しに戻ったというレベルではない。盤上の数値や配置などを全てリセットし、完全に始めからのスタートである。

「アンタが——いつも余計な事してくれるからでしょ！？ ム力つくのよっ！」

そういえば——。

思い出した。そういえば、そうである。ここは能力者が様々な世界から集まっている場所。捕獲されたネイティブアルターと同様か、それとも自らの意思かは分からないが、ともかく能力者”のみ”で構成されているといっても間違いは無い、らしき事を言っていた。カズマはソレを、脳内の浅い記憶の渦から引きずり出して理解する。気分的には牛の咀嚼だ。一度飲み込んだものを吐き出して、また良くすり潰す行程。

「人助けじゃねーか！ お前がいつも所構わずビリビリしてつから——」

「だーっ！ ヒトが考え事してんのにうつせーんだよッ！」

思考に夢中で目が視覚情報を取り入れぬ。だがそんな思考の妨げが、目から入らぬ情報を脳に送り思惟を乱し、考えが片言に浮かび

上がっては吸収されずに消えていく。そんな現状に苛立ちが臨界点を壊滅的なまでに振り切つて、カズマは振り返り様にそう叫んだ。

——視線の先に居る少年少女は、等身大の箱、いわゆる自動販売機の前でやりとりしている最中であり、カズマの怒声を受けると一様に驚いた顔をして、彼へと向いた。

ツンツン頭の、目つきの悪そうな少年が心底驚いたように右手で自身を護るように構え、肩までの茶髪を風になびかす少女はなにやら——体中から電撃を迸らせていた。

だがその電撃は無意識が敵と判断して発生させたものらしく、それは瞬く間に収まっていき、

「い、いやっ、あのですねそうですね、この口論につきましては私^{わたくし}上条当麻^{かみじょうとうま}には一切の責任が無く全てはこのビリビリこと御坂——」

最初に口を開いたのは、ツンツン頭の上条であった。なにやら流暢に言葉を滑らせるも混乱しているらしく、少女が大きく振り上げた拳骨を頭頂部に炸裂させて、台詞半ばで沈黙した。

カズマはそんなやりとりで若干気圧されながらも、退く事は無い。なぜならば、情報は手始めに彼等から聞き出そうと思ったからである。

「あー、私には関係が無いんで——じゃっ！」

上条を振り下ろす拳たった一打で撃沈させた少女、御坂美琴^{みさかみこと}は学校指定のカバンを片手に足早にその場を去っていった。だが、カズマは興味なさそうに彼女を追わない。どちらか一方さえ残って入れば、問題ないからである。

だからカズマは、上条にとっては比較的悪質に思えるいやらしい笑みを浮かべながら歩み寄る。そのころようやく痛みを克服した上条は顔を上げ、今度は世にも恐ろしき悪どい笑みに腹を据える羽目になった。

不幸だ——。

上条の心の声は虚しく消えて、その襟元を見知らぬ男に掴み上げられた。

——予想外に何事も無くベンチに腰を掛けさせられた上条は、静かに男の言葉を聴いていた。

そして全く要領を得ない事と、自分の心の落ち着き具合に驚きを隠せなかった。

「ちょ、ちよつとまってくれ。あ、アルター使い……？　アルターってなんだよ」

頭で分かっていると言葉で説明するのが面倒、もといできないのがカズマである。そう問われた途端に彼は膝に肘を付き、あからさまにうな垂れた。

彼は元々この世界の住人なのか？　いや、そもそもこの世界は、創られたものなのだろうか。世界を作る……果てしなく不可能に思える。いくらギャラン「ドウといえども、そこまで人類を超越した神的力量は持たないだろう。

だとすれば、何かを土台に”能力者だけの都市”を作るはずだ。ならば、この都市自体が元々あったものだと考えるのが良いだろう。わざわざ作るなんて面倒なこと、だれも思いついても口にはしない。そうすれば自然的に、原住民が居たと言う事になる。上条が何も知らぬということは彼は原住民と判断できるのだ。

無理矢理でも自主的でも、別の世界からこの世界へ連れて来られれば原住民——上条を例として、彼とは必ず異なる仕草が目立つだろう。最も、カズマは目立つ以前の問題なのでは有るが。

「お前は能力者か？」

なんにせよ、能力者を集める都市である。何も持たない原住民が住む都市を改造するとすれば、まず始めに原住民を排除するだろう。しかしあらかじめ、始めから何かしら特殊な力を持つ者たちが住む都市だとすれば——能力者を集めるのには、手っ取り早い土地であるといえる。むしろ好条件過ぎて逆に疑ってしまうほどだろう。

それを確認する方法はまず一つに、実際に戦ってみること。もう一つに、直接訊いて見る事。後者は正直に頷いてくれる可能性が低いと思われるが、どちらにしろ首を振った時点でカズマは上条に戦いを挑むつもりであったため、それ自体に問題は無かった。

倫理的に問題があるとすればカズマの思考と言ったところであろうか。

上条は、カズマに問われて少しばかり戸惑った。その様子は言うか言つまいかこまねいているようで、『わたしは能力者です』と言っているようなものである。カズマがその様子をただ興味もなさげに眺めていると、上条はようやく、

「まあ、一応」

歯切れが悪く、彼は答えた。

——自分が能力者だと答えたくない理由は、自分がこの『学園都市』最低レベルである無能力者レベルゼロという事実があるからだった。

この学園都市の学生の八割以上はレベル一、低能力者以上の超能力を持つ。能力開発を主とするこの学園都市では、レベル五と呼ばれる、学園都市内で七人しか存在しないエリート能力者の次に、レベル〇が希少種レアと言われるほどであるのだ。だがそれは単なる皮肉であり、レベル〇は量産されている現実がある。

彼の身なりは普通ではなさそうだが、同じ学園都市内に住む一生徒だろう。見ず知らずの彼にそれを言うのははばかられた。

だが意外な事に彼はそれ以上言及せず、「ふーん」とどうでも良さそうに返事をする立ち上がり——。

不意に目の前、彼らが座るベンチの前に光の柱が突き刺さった。

上条は空を見上げる。見上げた空の、雲は渦巻いていて、その中心部から、光を放っているようで……。

「さあて、今度は話の分かる奴かな」

カズマは自身がこんな風に降りてきたのかと考えた。が、目を覚ましたとき、上条は近くに居たはずなのにカズマの存在に気がついていなかった。まるで最初から、そこに居たように無視していたの

だ。

だとすれば、登場には個人差があると言う事か？ どちらにせよ、関係ない。カズマは頭の中で面倒な考えを排除して、やがて目の前に登場する人物へと、拳を構えた。

—— ジョジョの奇妙な遭遇 ——

「やれやれだ」

目の前の男はポケットに手をつ込み、その長身は長身故に背後へ倒れてしまうのではないかと心配になるくらい背後へ反らされていた。だがそんな心配も受け付けぬ威圧が、だが恐怖を与えぬ知的さや冷静さが彼にはあった。

彼の名前は空条承太郎^{くへいじょう じやうたろう}。歳は二九で、現在は海洋冒険家らしく、ついこないだは杜王町^{もりおうちょう}と呼ばれる町でヒトデに関する論文を書き上げ博士号をとつたらしい。さらに海洋生物研究の第一人者であり、そちらの方面”でも”名を馳せている。

「こつちでも有名だぜ？ 『星の白金』^{スター プラチナ} つつウのは」

人間ではない何かが口を開く。だが人間の形を作るそれは一概に人間ではないとも言い切れないのだが、やはりその風貌や滲み出る力強さ、頑健そうな肉体は空条承太郎を始めとする”その世界”に住む特定の人間の生命エネルギー^{スタンド}が作り出すパワーある像——いわゆる『幽波紋』^{スタンド}に近かった。

スタンドは、そのスタンド自身の能力にもよるが人の形に似る事がある。そしてソレは”本体”からそう遠くまでは離れられない。スタンドの力が強ければ尚更である。が、今目の前にしているスタンド疑惑の浮かぶソレは、付近に本体の気配を見せないどころか、人っ子一人居ない場所に居る。

彼らが居るのは東京某所、冷たい風が吹き荒れるビルの屋上である。西の空には真赤に燃える太陽が沈みかけているのが見え、頭上の空は薄紫色に染まりつつあった。

だから、見て強いと理解できる程のスタンドが自立行動など出来る筈が無いと思われたが——以前、杜王町を訪れたとき、本体との距離は関係なしに発動し延々と目標が絶命するまで追尾する『遠隔操作型』のスタンドと出くわした。

その事例があるからこそ、やはり目の前の、まるで自身のスタンド、『スタープラチナ』のような強靱さを持つ男の存在をスタンドではないと、否定する事は出来ない。

そしてその台詞だ。スタープラチナ。星の白金。人の形をとるスタンドで、精密動作や攻撃力、その成長性などはピカイチであり、彼を知るものならばひれ伏さざるを得ないほどの強さを持つ。

スタンドはスタンド使いにしか認識する事が出来ない。スタンドはスタンドでしか倒す事が出来ない。それ故に、彼がスタンド使い、あるいはスタンドである事は瞭然としていた。

「てめーの本体はどこにいる？」

空条承太郎は飽くまで落ち着きを保ったまま口を開く。

スタンド疑惑を得た男『ギャラン・ドウ』は拳を作り、そこから親指を弾いて自分の胸を軽く小突いた。

「今、ここに」

にやりと笑い、白い歯が煌めくのが印象的な彼は冗談っぽくそうするが、ギャラン・ドウはどこまでも常に本気である。

そして、そうした瞬間——ギャラン・ドウが次に知覚したのは、激しい痛みだった。

身体が宙を舞う。そしてすぐさま人造石の地面に叩きつけられ、視線は空を仰いでいた。

「あまり舐めた口を利かねー方が身のためだぜ」

気付くと、承太郎は頭の先に立っていた。これは最速というレベルではない。速度を知覚させない。まるで瞬間移動をした様な——否、時間を止めたような感覚。

ギャラン・ドウは知っている。十一年前目覚めたスタンド『スタープラチナ』、そして激しい戦いの中、宿敵である『DIO』との戦闘中に”時を止める”能力が発現したという事を。

あの頃は五秒の時を止められたが、現在ではどうやら二秒程度。だが彼の力を以ってすれば二秒でギャラン・ドウを倒せていたかもしれない。彼がこうして生きているのは、承太郎の優しさか、はた

また気紛れか。

ギャラン・ドゥはまた白い歯を煌めかせてから、立ち上がり、空を仰ぐと――光学迷彩を引き払い身を露にする、巨大な戦艦が突如頭上上空に現れた。

「……宇宙船型のスタンドってわけか」

「カッコいいだろう」

ついさっきカズマにそうしたように彼は親指を立てて彼を見た。

承太郎は帽子を目深に被って首を振る。彼はどうやらそこで、ギャラン・ドゥに確かな敵意が無い事を確認したらしい。

「それで、ためーはおれにやり返しもしねートコから見ると、他に別な用事があるらしいな。ソレはなんだ？ 言ってみな」

「俺の目的のために、とある世界へ来て貰いたい――つう話だがア、お前は素直に聞いてくれるとは思わない」

ギャラン・ドゥは顔に薄い笑みを浮かべたまま拳を構える。同時に、承太郎の背後から突如人影が現れた。

「拉致しようつてのとは違うらしいな。だが、おれも”はいそうですか”とおまえに付いて行くわけにはならんのでな」

彼は久しぶりに自分の為の闘いをする。今までは母親のため、仲間のため、そして町のためと様々な保護対象が背後に存在していた。だが今はそれが無い。完全に一人であり、だが敵意の無い、純粋な力比べ。不要な闘いは今まで避けてきたし、頭にくれば戦いはしたがスタンドは使わず、そもそもそうだったことも今までなかったし、そもそも今日の前にしている男……なのかどうか判別の付かない存在は、どうにも苛付く対象にはならなそうである。

だが、上空の戦艦型のスタンドと戦うのなら些か不利であるし、街への被害が甚大になるであろう。だが目の前の男が拳を構えるあたり――彼もスタンドであり、戦艦もスタンドなのだろう。

力尽くで承太郎を『学園都市』に引き込もうとしているギャラン・ドゥは、なぜだかスタンドを認識できていた。恐らく、特殊能力という共通点のみで繋がっているからそれが出来るのだろう。この

世界とは別の存在だからこそ出来る事だ。ギャラン＝ドウならまだしも、アルター使いや純粋な超能力者などにはどう見えるのだろうか。彼は少しばかり興味が出て、またあの世界にスタンド使いの必要性を見出した。

スタープラチナが承太郎と共に肉薄する。ギャラン＝ドウは対峙するべく足を進めた。

緊張が高まる。相手は強い。一撃で、恐らく軽くの攻撃で自身を転ばせてしまうほどである。いくら時を止めているとは言え、その屈強さはいやと言うほど理解できた。

見えぬ威圧が音を鳴らす。まるで怒涛の如き圧力。拳に力がこもり、ギャラン＝ドウの喉が鳴った瞬間——頭上から光が、降り注いだ。

「はっは——まともに相手するわけねエだろお馬鹿様がッ！」

承太郎が行動するよりも早く、次元転送装置からの照射は二人を包む。承太郎は何がなんだか理解で絹が、ともかく今現在卑怯な手段に嵌められたことを理解する。だが、彼が共に同じ光の中にいると言う事は即ち、同じ効力を受けると言う事だが、一体、何が起きているのだろうか——。

承太郎の意識はそこで、自身の姿と共に消えうせた。

光の柱の中で人の影が形作られ始める。まるでその光景はアルターを構成するようであり、そしてそれは瞬く間に終える。そこに現れたのは長身の学ラン姿の男と——頭に藁を乗せるギャラン＝ドウであつた。

「よオカズマ、奇妙なところで出くわすなアッ！」

そして彼は次元転送に怯む事無く、すぐさまカズマを捉えて声を掛ける。激しく鼓膜を叩く音声に、隣の上条当麻はすっかり怯んで腰を抜かし、ベンチに行儀良く腰掛けた。

「っせーんだよ毎度毎度ッ！ ソイツはなんだ？ また……パパラ

ツチ——」

「パラレルワールドだってエッ！」

「わーったよ、ウルセエなあ」

空条承太郎は彼らのやり取りを見ながら、なんとなく、理解し始める。彼は振り返り、そこが高台であることを知って、街の景色を脳に刻んだ。ビルが立ち並び、飛行船が飛ぶ景色。まるで画家が書いた未来像の絵画のようだった。近未来的であるも、それが妙に現実的で直ぐにでも実現してしまうような、引き込まれるような景色は画になった。

「この学園都市では外からの侵入者には厳しいが、俺たちや次元転送装置は実質無視している。こいつは俺と協力関係にあるという訳だ——付近の学園にはそれぞれ施設がある。お前等はそこでとりあえず世話になっているオ」

彼は言うだけ言うと、強く地面を蹴り飛ばす。まるで浮き上がるように大空へと跳び上がったギャラン「ドウはすぐさま次元転送光を一身に受けて、再び時限転送装置と共に姿を消した。

騒々しい彼は、まるで嵐のようにすぐさま消え去り、まともな会話も説明もないままに落ちて着いてしまう。上条当麻はよろつく腰に鞭を打って立ち上がり、突如現れた白コートの男を遠めに眺めた。

カズマは同じ境遇のソレを見て、こいつも”アルター能力者”か？ あるいはそれに類する何か特殊な能力を持っているのだろうか？ そう考えるもそれ以上の興味は湧かず、上条の隣に立つ。

カズマの頭一つ分背の高い承太郎が振り向くと、相応にガタイが良いのが良く分かった。カズマは勿論、そんな事など関係なしに威圧される気圧されもしないが、ただの人間である上条はやはり恐れをなして、再びベンチを尻で叩いた。

「ひとつ尋ねたいんだが……ここは一体どこだが、説明してくれないか」

「俺もここへ来たばかりでね。詳しいことはしらねーよ」

「俺も、あんたたちの状況が分かりに過ぎて、説明しようにも……」

「……やれやれだ」

カズマは肩をすくめ、上条は困ったようにうな垂れる。承太郎は再び帽子を目深に被りなおしてそう呟いた。

西の空は、彼が居た世界と同じ時刻を刻んでいるのか、夕日が沈みかけているようだった。

見慣れぬ街並みは、少なくとも外界からの異物には衝撃的で、原因不明の焦燥と緊張と、ストレスを同時に与えていた。

高台から左右に伸びる緩やかな坂を下り、周囲からの注目を受けながらも、上条当麻^{かみじょうとつまま}、カズマ、空条承太郎^{くうじょうじやうたろう}の三名は何の感慨も興味もなさそうに、街の中へと突入した。

上条曰く、近くの学園も、歩いて一時間もかかる場所なのだという。その間上条は、特に目立つ二人を連れて歩き案内をしなければならぬので、とても不幸だと、嘆いていた。カズマは市街に似た発展した街並みを眺め、そして平穩そうな住民を流しながら見て、大きく溜息をつく。承太郎は無表情で、ズボンのポケットに手を突っ込んだまま後を付いていた。

彼らの存在は、最も非日常に近く問題が起き易い。そう危惧していた上条だが、何のことはなく、安全を保ったまま、到着する事が出来た。閉じられる鉄柵の右手側の壁に、『定規士学園^{じようぎしがくえん}』と書かれたのを見るが、上条にはその名に覚えはなかった。

「本当にここで大丈夫なのか？」

不安がる上条は独りごちた。そんな台詞に、カズマは迷わず目の前の鉄柵を分解する。円形に綺麗な穴が空く鉄柵は、その断面を極彩色に輝かせて、次々とその身を空气中に粒子として崩して行つて——カズマの右腕に、特殊装甲^{シェルフリット}が再構築された。

上条が眼を見開いて、後退する。背中では壁を叩き、そして緊張した。

超能力者であるらしい事は理解していたが、どんな能力なのか気にはなっていたが——分解、再構築、さらにその質量、属性とは全く異なる物質を作り出すなんて、錬金術じみた能力だなんてことは全くの予想外である。そもそも、この学園には特殊武器を作るような能力者は存在しない。最早これは、魔術の域であらう。上条は思

った。

承太郎は禍々しい右腕の装甲を見ながら考えた。こいつはやはり『スタンド使い』であつたのだ、と。能力を見る限り本体と融合装着するタイプ。昔エジプトへと向かう道中で、スタンドを纏うタイプの敵と戦つたことがあるが、あれとは似て異なるスタンドだろう。だが敵意は無い。恐らくこの学園の中に突撃するつもりだろうが――

「待て」

承太郎は、今にも飛び出しそうなカズマの肩を掴んで行動の制止を促した。

「無用心に突つ込むのは賢くないな。奴の罠なら確かに敵が潜んでいるかもしれないが、よく観察して行動しなければ、命はないぜ」
「罠だろうがなんだろうが、正面からぶつ潰す！」

カズマが咆える。いよいよ本気で論しにかからねばと意気込む承太郎は、失せた鉄柵の向こう側から飛び出た黒い陰に、すぐさま臨戦態勢をとつた。カズマが承太郎からの解放と同時に敵の襲来を察し、大きく拳を振り上げてコンクリートの大地を殴つた。

カズマがその反動で高く飛びあがる。まもなく空中で、影と交叉すると――カズマの拳は空振りし、身軽な蹴りが彼の頭を蹴り飛ばし、カズマは勢い良く地面に叩きつけられた。が、そのまま軽く地面を弾き、四つんばいになるような形で受身を取り、かつて存在していた鉄柵よりも内側に、それが降り立つのを見た。

紅い、上下一体型のワンピース調の服を着るが、裾はふともも半ば辺りで終えるミニスカであり、胸元から逆十時のように布地が切り取られている仕様があつた。二の腕まで伸びる黒い指貫の長手袋はゴム製であるらしく日の光に鈍く照り、左足だけにオーバーニースックスを履く奇妙な女は長いブラウンの髪を柔らかく揺らしながら声を上げた。

「ぢやつぢゃ〜ん」

それは酷く間抜けな効果音だつた。

瞬く間に体中の力が抜けていき、これが彼女の特異能力かと思われたが、それは違うようだった。

「もう、エクレール……女の子はエレガントに、ですわよ」

そんな彼女の背後から、スクール水着に袖とちよつとした裾をつけたような戦闘服を着る、まだ幼そうな少女が、長い銀色の髪を右側でカールにし結って、それを歩くたびに揺らしながら、やってきた。

「この学園での乱暴は固く禁止されています。それ以前に……、ご理解頂けますか？」

彼女は学園の敷地内から出てくると、通り過ぎ様に門があつた場所に目配せをして、それからカズマに、承太郎に、最後に壁に張り付く上条へと視線を流した。

どうやら彼女達は、ギャラン「ドウが用意した罠ではなく、純粋に学園の警備に当たる者たちなのだ」と承太郎は理解する。が、カズマは撃墜された事によって、闘志に火がついた。

「わかんねーよっ！ もう一度だ、もう一度やろうぜ、アレを」

カズマが拳を握り、顔の高さまで上げてエクレールと呼ばれた少女を誘った。だが彼女は紅が付いた口元を軽く緩めるだけで、

「イヤよ、だつて疲れるじゃない」

エクレールは首を振る。カズマは燦る魂を更に燃やそうとして拳に力を込めるが——その拳は、見たことの無いグローブを装着する手が、止めていた。

カズマが振り返る。すると、承太郎の前に立つ、同じ背丈であるが異常なほどに筋肉が隆々としている、人の形をとる”何か”が手を伸ばしているのが、確認できた。なぜカズマが人の形を取り限りなく人であるそれ、『スタープラチナ』を人間ではない何かと感じたのか。それは、圧倒的な力が感じられたからであり、また人間とは違う違和感を受けたから。なにか、途轍もない生命パワーだけで構成されているような感じがして、カズマは”これが奴のアルターか”と認識した。

「離せよ」

「無駄な闘いはするな。向こうはお前の行動から”誤解”をしているに過ぎない」

「関係ねえな」

怒りに満ちるカズマの表情に、承太郎は「やれやれだ」と帽子を深く被りなおした。最早言葉による説得が通じる相手ではない。ぶち切れた時の『ひがしかたじょうすけ東方仗助』を思い出し、軽く息を吐いた。

彼は怒りを発散しない限り、正常には戻らないだろう。面倒だし、厄介だが、一度ぶちのめすしかないようだ。

「オラア！」

丸太のような腕が、肉眼で捉えられない速度で肉薄する。カズマは背に構築した三枚の羽の内一枚を瞬間的に消費し、そこから推進剤として猛烈に極彩色のアルター粒子が噴出され、カズマは僅か一瞬で拳の着撃地点より一歩分前進し、強烈な威力を誇る拳がスタープラチナの顔を狙う。

「衝撃のファーストブリットッ！」

だが次の瞬間。

カズマの拳は虚空を貫き、推進剤に押されて”承太郎”が居た場所へと突っ込んだ。身体を捻り背後を見るとカズマが立っていた場所よりやや後ろに彼が居て、そして右腕に鈍い痛みが走った。特殊ブリット装甲に入り込んだ小さな亀裂は、まるで連鎖的に全体へ、そして細かく広がり、彼が勢いを殺すために大地をその手で引きずると、シエルブリットは音もなく崩れて、粒子と化し消えていった。

ほんの一瞬——知覚できない速度で背後に回ったと思うと、その間に更に右腕に打撃を加えて特殊装甲を破壊したのだ。カズマはやや離れた位置に立ち直ると、さらに地面を分解し、シエルブリットを構築しなおした。

そこで、承太郎が違和感を抱く。

スタンドは、自分が受けた傷をスタンド使いに返すものだ。そして融合装着型ならその腕諸共破壊されてもおかしくは無いはずなの

に――腕を護る程の防御力はソレには存在せず、さらにその腕は未だ健在。そしてまた新たに同じものを出現させたのだ。これは可笑しい。特殊能力は、一体なんなのだろうか。

今の一瞬、”時を止め”ざるを得なかった。ただの相手にそれほど爆發力があるとは思えなかったが、どうやら甘く見すぎていたようだ。どんな能力だろうと全力で叩き潰す。それが空条承太郎だ。「やるじゃねえか、アンタ」

そんな状況に、上条は酷く困惑した。

まるで一瞬。そんな光速じみた速さで彼らの中は決裂し、さらに戦闘へと持ち込まれているのだ。どうにかしなければならぬ。だが上条は、どうにかできるはずも無い。だから、恐る恐る学園内から飛び出てきた、能力者で且つレベルの高いであろう彼女等へと目配せをした。

すると、銀色の髪を右側でカールし結う少女が、上条へと優しく微笑んで、

「エクレール、お願いしますよ」

彼女は後ろを振り向くと、エクレールと呼ばれた少女は高く飛びあがって――何かを掴む様に形づくるその手は空間が歪んでいるように見えた。

そしてアンダースローでソレを投げる。彼女が放つそれはカズマと承太郎の間に落ちると、強く弾けコンクリートを抉る。飛び散ったそれらを、承太郎はスタープラチナで弾き、カズマはシエルブリットで砕くと、次いで再び彼らの中間地点で、エクレールが着地した。

「貴方達、別世界^{パラレルワールド}の住人ね？ 能力を見る限り、貴方がスタンド使用で、貴方がアルター使い。話は全部聞いてるわ、とり合えず中で話をしようじゃない？」

「……？」

てっきり実力や言葉で彼らを制止してくれるものとはかり思っていた上条は、そんな予想外の関係者ぶりに腰を抜かした。自分だけ

が蚊帳の外のような風に思えて、久々に問題なく帰れる。

「——そう考えていた時期が、僕にもありました」

上条は気がつく、学園内の応接室に居た。長く広く柔らかく、適度に弾力の有る純白の、皮製のソファに身を沈め、隣の承太郎、座るほどの落ち着きを取り戻さず、背後でウロウロし窓の外を眺めているカズマへと視線を投げながら、大きく息を吐いた。

不幸だ。

そう心中で呟くと、彼女等がやってきた。

「ぢやつぢゃん、待った？」

元気良く扉を開け放って第一声に効果音を、そして次に本来発すべき第一声を紡ぐ。だが承太郎は膝に肘を置き前屈加減に顔を俯かせ、カズマは興味なさそうに、窓からグラウンドを眺めていた。

ロールに結う少女、リユミエールは小柄な身体を彼女のメリハリの有る体の影からしのばせ、彼らの前に鎮座する長テールに、それぞれ人数分の紅茶を並べ始め、それが終わると共に席に着いた。エクレーもソレに倣い腰を落とす。

「あ、あはは、いえ、そんな事は……」

仕方が無いので、上条は不器用な笑みを浮かべて頭を掻きながらそれに返す。エクレーは目を細めて微笑むと、流すように承太郎へと目を向けた。

「アナタは特別”ギャラン”ドウ”と交渉したわけではなく、そっちのアナタは彼と交渉の結果、この世界に来たって訳ね」

承太郎は沈黙したまま、上条はカズマからの話が嘘偽り無かったことを再認識して、これが現実だと、不幸に巻き込まれたのだと認識する。

「確かに、この世界……いえ、この”学園都市”では様々な組織が裏で活動しているわ。元々存在していたものから、ギャラン”ドウ”パラレルワールドによって別世界から連れて来られた人間『イレギュラー異端者』が継続して作る組織。私たちもそう。任務でこの世界に来ているんだけど、その仕事はコレで」

「公認なのか？」

「いえ、身分を偽って活動しているのよ。でも勝手に、組織のつながりも無い人間が来るから、その人間を保護する役割を、私たちがしてるの。連れて来られる人間はみんなあの高台から来るからね」
そこに上条——この世界の住人が居て、異端者と関連を持ったから、ここへ来ると確信して待っていた。彼女はそう告げた。

身分を偽り様々な手引きを行ってくれる組織が無いモノは、学園都市の警備によって捕らえられてしまう。ギャラン・ドウがいくら裏で繋がっていても、表向きはそうしないと体裁が取れないためである。そして、捕らえた人間が問題を起こす事も、捕らえた人間に問題を起こす事も許されては居ない。

どちらとも厄介な結果となるために、彼女は組織から、派遣されたのだ。その他にも仲間が居るらしいが、あまり接触の機会はないらしい。

「おれがこの場に連れてこられたのは、そのギャラン・ドウの目的達成のための駒になる為といったところか。ギャラン・ドウと直接交渉するのが現実的な案だが……」

彼と連絡を取る手段が無い。この案で最も致命的な部分であった。
「とりあえず、部屋を用意したから。そっちの案内を先にさせてくれないかしら」

「……ああ」

承太郎は短く返事をすると直ぐに立ち上がり、カズマは気だるそうに、部屋を出て行くエクレールと承太郎の後を追った。

上条はソレに乗じて帰宅を図るが、なぜだか自動的に閉まる木製の扉に度肝を抜かれて——リュミエールと紅茶に付き合う羽目となる。

短く息を吐いて、彼は彼女から大体のことのあらましを聞くことにした。

「このネウロイ、早すぎて捕捉出来ませんっ！」

その世界の某所、ブリタニア連邦と呼ばれる島の遙か北方の海上。彼女等は両足に装備する、魔導エンジンにより稼動する飛行用機械『ストライカーユニット飛行脚』で空を舞いながら、異形の敵『ネウロイ』と対峙していた。

彼女等是一般に『ウィッチ魔女』と呼ばれる。それは魔力を自在に発揮しストライカーユニットを稼動できる少女の総称である。ウィッチは飛行脚の稼動の他に、魔力フィールドを展開したり、ちよつとした質量の物を動かしたり出来るが、飛行脚の作用により爆発的に増幅する魔力は、弾丸やネウロイの放つ、戦艦を両断してしまう程のビームを防ぐ事が出来るくらい頑丈な魔法シールドを作る事が出来る。また各々には固有魔法と言うものが存在し――。

「点で見るな、線で捉えろ！ ネウロイの核は先端部分にある！
コア

宮藤っ！」

「はいっ」

右目の眼帯を外し、その奥にある異色の眼球が妖しく光る。それは彼女”坂本美緒”の固有魔法『魔眼』であり、それは遙か遠くを見通したり、ネウロイのコアを見切る能力を持つ。彼女は飛びまわるウィッチ達よりやや離れた位置に居て、刀を片手に下げながら指示を出した。

”みやふじよし宮藤芳佳”はそれに対して元気良く返事をし、額から流れる汗を風に散らせながら、肩から提げる九九式二号二型改一三ミリ機関銃のトリガーを力強く絞った。

紙飛行機のような形状のネウロイはそれを易々と避けると、自ら逸らした軌道上看つけた一人の少女に向かって、疾風のように空中を駆けるが、

「まあ、速いっちゃ速いけどさ……」

同時に彼女等も高速度で向かってきている事に、ネウロイはようやく気がついた。一瞬、目を離すと既にその姿は肉眼で見える距離に肉薄するのだが、その速さ故に、姿を認識する事は出来ない。

「いづくよ」

一人だと理解していたと思うと、その実、もう一人が密着していた事に、重なっていた事に気がついた。だがその頃には既に二人の身体は光り輝く光熱に掻き消され——瞬間、ネウロイと彼女等は衝突した。

と思われたが、正面衝突したほどの衝撃はなく、ネウロイはすれ違い様に腹部の装甲を完全崩壊させながら、フワリと上空へ上がったと思うと直ぐに身をくるくると回転させながら海へと落下し始めた。

亜音速で肉薄せしめる速度を出した”シャーロット・E・イエーガー”と、光熱エネルギーで自らを光熱の弾丸にした”フランチェスカ・ルッキ―”は交叉した場所よりやや離れた位置で停空し、次の瞬間、ネウロイの身体が大きく弾むのを見た。

その数瞬後に、ようやく発砲音が聞こえる。それは遠距離射撃によるものであるが、しかし核を破壊する事までは出来なかった。遙か遠方で対装甲ライフルを構える少女”リネット・ビショップ”は一キロ以上先をも見通す視力と、弾丸の安定の魔法を持つ。彼女は腕に残る強い衝撃を味わいながら、再びネウロイに銃口を向けた。

「もう修復するの!? ……、フラウ、トゥルーデ、左右から装甲を削つて。クロステル、電撃をお願い」

リネットとネウロイの中間に居る指揮官”ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ”は右手を前に差し出して彼女等に指示を下した。

宙を、ネウロイの様子を窺いながら指示を待っていた金髪の小柄な少女、フラウと呼ばれた”エーリカ・ハルトマン”と、機関銃を二挺装備し十分扱える腕力を持つ、トゥルーデと呼ばれた”ゲルトルト・バルクホルン”はネウロイとの距離が半分以下になると弾けるように左右へ分かれて、体勢を立て直したネウロイへと、その

まま両脇から突っ込んだ。

ハルトマンはその身を高速回転させ始めると、同時に自分自身が竜巻と化す。ネウロイが彼女の大掛かりな攻撃を認識し、その先端部分から紅い光線を瞬時にして発射するが、即座に展開された魔法シールドは着弾の被害を防ぎ、勢いでビームを撒き散らし、防御と攻撃を同時進行する。

その影を移動するバルクホルンは機関銃を本来の使い方をせず、銃身を力強く握りなおすと、それを肉薄したネウロイの装甲に叩き込んだ。強い抵抗が機関銃を弾くが、代わりに素材不明の黒い装甲を砕き剥がした。彼女は開いた穴に二本のグリップを突っ込み、自らの腕力でネウロイへと二閃加え——やがて巨大な溝を作り終える。と、竜巻と化したハルトマンが、直後、そのままネウロイの腹に直撃した。

理解を超える攻撃力はネウロイの腹に巨大な穴を空け、装甲修復の速度を著しく低下させる。一閃の溝は未だ埋まることなく、

「行きますわよっ！」

癖毛で眼鏡をかける少女”ペリーヌ・クロステルマン”は指先を額に近づけ、その間に電撃を迸らせると、勢い良く指をネウロイへ振り下ろす。指先から放たれる、鋭い電撃はネウロイがそれを知覚するよりも早くその先端部分に直撃し、爆発。三分の一程の装甲を一瞬にして引き剥がした。

そして直後、ネウロイの間近に飛び込む影が、間髪置かず剥き出しになる、紅い宝玉のような核へと全弾放射^{フルオート}を行って——。

ネウロイは全身を輝かせると、軽い爆発を巻き起こす。そしてその身は光り輝く粒子となって、辺りに舞い散り始めた。

——戦闘終了。ネウロイの完全沈黙を確認した彼女等は、手にかける機銃、ライフルから手を離し、それぞれ思い思いに息を付いた。最早なれた戦闘は、だが終わる事は無い。一度の撃退が成功しても、その次、また次と不規則にネウロイの襲撃がやってくるのだ。原因、目的は不明。ネウロイの巣と呼ばれる巨大な暗雲のようなも

のが出現し始めてから、ずっとこの調子であつた。

そして世界中からウィッチが募られ、その最前線に、彼女等は居る。彼女達は『ストライクウィッチーズ機械化航空歩兵』と呼ばれる、唯一ネウロイに対抗できる戦闘部隊である。

一人一人にずば抜けた戦闘能力は、確かにある。だが一人では、ネウロイには負けてしまう。彼女等は集まることで、結束する事でその力を爆発的に、潜在能力以上に発揮するのだ。

「——だから、来て貰おうか。学園都市に」

”ソイツ”は不意に、やってきた。

ネウロイの粒子が空気中に舞う中、上空に突如現れた、ネウロイではない戦艦はまるで光学装置ステルスで姿を隠していたのか、気がつくところ

そこに居た。そして声が聞こえた。すぐ目の前から。

「新手のネウロイかっ!？」

坂本美緒の、叫び声じみた声が辺りを緊張で引き締めた。宮藤は突如目の前に現れた、宙に浮く——人間なのか、それさえも定かではない人型の何かに目を奪われ、度肝を抜かれ、行動不能状態に陥っていた。

「あなづき穴拭中尉サマも良いと思つたが、複数で欲しかったからなア。お前たちの功績の方が有名だし」

それぞれが、すぐさま銃を構え始める。隊形は正面に、宮藤と坂本、そして右脇にシャーロットとルッキニー、左脇にエーリカとバルクホルンが側罪に配置する。ペリーヌがそれより後方で電撃の準備をし、その背後でミーナが腰から拳銃を抜いて、遙か遠方では、リネットがその眉間に照準を合わせていた。

瞬く間に囲まれたギャラン・ドゥは両手を上に挙げ、降参だと軽く微笑んだ。だがその笑顔は酷く邪悪ゆえに、何かを企んでいると相手に誤解を生んだ。

以前、人型のネウロイが出現した。その事もあつて、人型だからネウロイではない、とはいひ切れないのだ。

「オイオイ、冗談じゃねーって。本当マジによオ。オレは、お前等に違

う場所で働いて貰いたただけなんだ。ついこの間、据え置き型次元転送装置の開発に成功したしな」

「な、なんの事？」

「宮藤、惑わされるな。こいつは人語を操って混乱を招いているだけにすぎない」

「そうですわよ豆狸。貴女は少佐の言う事に従ってれば良いのです」「だーから、これから説明してやるが――」

それを始めとして、ギャラン・ドウは久々に口の中がカラカラになるまで喋り続けた。極力、転送する再には無傷のほうが良いし、下手に脱出の作戦を企てられても困る。理想は、自分から学園都市に向かい、構成することを目的として抱く事なのだ。自分らしくはないが、そうせざるを得ないだろう。

無論、学園都市から誰かを救い出す事を目的としている奴も居るが、そいつは放っておいて構わない。自分が連れてきた人間であるし、仮に『ホーリー』から抜け出せたら、改めて誘えば良い。その上で、ホーリー等の数多の組織を統べる人間を作り出さねばならないだろう。面倒だが、土台が大切なのだ。

不思議と真剣に話を聞く彼女等は、話が終えると同時に、思い思いに思考する。

そして一番に口を開いたのは、宮藤芳佳だった。

「で、出来ません!」

「なぜだ？」

「私たちが居なくなったら他の皆さんに迷惑が掛かります! それに、自分の出来る事もやらないで平和な世界だなんて……行けません!」

「その点は安心しろ。お前たちが学園都市へ行った後、絶対壊滅無敵殲滅軍団を派遣する。どちらにせよ、学園都市でも何か異変が起こっている……そこでお前たちに力を使って欲しいし――言っただろう? 俺の許可さえあれば、自在に行き来ができ、それを許すと」「貴方の話も確かに、興味深くは有ります。ですが、幾らそちらで

増援を呼び私たちの代わりをさせても、完全に私たちの代わりが出来るわけではありません。個人個人、そのままがこの場と向こう側に存在するというような仕組みならまだしも」

「なあ、ミーナ。私は思うんだが、向こうへ行く組と、残る組に分かれればいいんじゃないか？ 私には、コイツが嘘を言っているようには見えないんだ」

坂本美緒は、静かに諭すように、赤毛の少女に言葉を返した。それにミーナは何かを言い返そうとするがやはり言い返されてしまう、あるいは自分の発言はこれより理路整然としないだろうと思えてきて、彼女は沈黙した。それから、自分がどうしても彼の用件を断りたいのだと、理解した。

「いいなあそれ、面白そう」

沈黙が始める前にそれを打ち破ったのは、音速の持ち主である”シャーロット・E・イエーガー”、通称シャーリーであった。

「ね、ね、あたし行ってみよう」

子供っぽくはしゃぐルツキー二は忙しく動き回り、自分の気持ちを口にする。そんな彼女等が発言した途端に、張り詰めていた重苦しい緊張の空気は不意に破裂して、和やかというか、朗らかな、さほど大きな問題ではないような、どこかへ旅行に行くような雰囲気と化し始めた。

それからルツキー二はギヤランⅡドウの前まで飛ぶと、右腕を海と平行に、左手を伸ばして右腕の半ば当たりに直角に当ててTの字を作り、タイムを指示する。彼は軽く頷くと、ルツキー二は嬉しそうにウィッチーズの輪の中へと戻っていった。

——それから三〇分程が経過した後、宮藤芳佳、坂本美緒、リネット・ビショップ、ペリーヌ・クロステルマンの計四人がギヤランⅡドウの前に並んだ。

まだ未熟な三人に、保護者兼指導役が一人の構成である彼女等に、ギヤランⅡドウは納得したように頷いた。

「お前等が来るのか？」

「ああ、そちらのネウロイがどれほどかは分からないが、私たちで事足りると判断した」

「ま、どのみち激しい戦いにはなりやしねエがな……」

ギャランⅡドウが空を見上げる、残ったウィッチ隊はある程度下

バラレルワールド

がり、別世界組に手を振ると、まず始めに芳佳が元気良く手を振り、

次いでリネット・ビショップ、通称リーネが控えめに手を上げた。

美緒は真剣な眼差しでミーナに視線を送ると、彼女は軽く頷き、ペリー又はそんな坂本に見とれていた。

そんな彼女等に一抹の不安を覚えるギャランⅡドウは、そのまま次元転送するために、彼女等と自分を包む光線を放射して――。

「な、なによあれえっ!？」

エクレール、カズマ、承太郎の三名は学園付属の寄宿舎に案内される途中で、空に浮かぶ不自然な飛行物体を見た。そして――攻撃された。

身を投げるように突っ込んできるところを、各々の超人的な身体能力で回避する。その瞬間、三人は敵の姿を視覚的に認識する事が出来た。

相手はまるで――ハチを擬人化したような人間であつた。薄い紫色の癖の有る髪に、大きな瞳は黒一色。大きな胸はそれに輪を掛けるように、黄と黒で縞模様が出来ており、それが全身に張り付くような衣服にも模されていた。頭には触覚があり、その下に勾玉のような形の複眼。背には大きな羽虫のような羽。

理解に苦しむ姿に加える飛行能力は、彼らの頭を混乱させたが、承太郎は迷わず、スタープラチナを素早く背に立たせた。

それを見てから、カズマも右腕にシエルブリットを構築する。辺りに大きな穴が空き、エクレールは戸惑いながら、ふき取った口紅を再び口に塗り、素早くそのスティックで地面に線を引くと、それを強く引いて紅い鞭を作り出した。

場所は、学園の門から出て直ぐの場所。広い故に、飛行する敵には有利となる場所であり、また接近した際に反撃の手段が広く与えられるフィールド。だから彼らは、純粋な敵意に、同じ敵として立ち向かった。

上空を大きく優雅に旋回しながら、標的を定めているらしい彼女は素早く、誰に決めたかも分からぬ飛び方で地上を目指すために急降下した。

思考する暇も無い素早さに、エクレールはリップスティックと一体化する鞭を大きく振るう。風を切って瞬間的に肉薄するそれは、それでもそれを上回る速さ、機動力で紙一重で避けられて——その前方に待ち構えていたカズマが、背中の羽を一枚消費し、推進剤を放出。カズマは凄まじい勢いで拳を放つが、蜂の娘は地面スレスレの低空飛行で衝撃波も喰らわぬように回避して——。

「スタープラチナ・ザ・ワールド」

スタープラチナが瞬間、時を止める。止められる時間は二秒。時間が止まっているのにそう説明するのは矛盾しているが、承太郎が感じる時間的に大体二秒程度、という意味である。

「やれやれだ。これがスタンドではない事は理解^{わか}るが……アルター能力者か？ それとも超能力者……」

いや、それよりも人間に見えない。身に纏うタイプのスタンドかもしれないが、羽を生やして空を飛ぶことまでが可能となるのか？ それを考えればスタンドという可能性も高くなる。アルターである可能性もあるし——人外である事も、考えられるが……。

承太郎は低空飛行の姿勢で硬直する彼女の傍らに立ち止まって、スタープラチナの腕を大きく振り上げた。敵対した以上、戦闘不能程度には痛めつけようと考えた故の行動である。

が——その瞬間、承太郎はふと視界の外に、新たな影を捉えていた。

それはあと少し外側に居れば完全な死角となりえた上空。振り返ってみると、そこには巨大なコウモリのような翼で空を飛ぶ、緑色

の長い髪をした何かと、縁が赤い、同じような翼で紫色の短髪である何かである。スタープラチナの視力で捉えると、それは人であるように思えたが、今承太郎のすぐ下に居る人外に似た蜂の娘と同類であると、彼は本能的に悟った。

そしてこのまま彼女を攻撃しては、確実に新たな敵の不意打ちを受けてしまう。そう考えた承太郎は、仕方なく身を退いてから、
「時は動き出す」

——蜂の娘は、カズマの脇を取りぬけて再び空へ。そして数瞬置いて、音速に近い速さで肉薄する二対の何かは、瞬く間に承太郎たちの上空に停留した。

風が渦巻き吹き荒れる。エクレールは顔に掛かる髪を押さえながら空を見上げ——派手な格好をする三人の女性に、本当に彼女等は敵なのかと、疑った。

たわわに実る胸は薄い布一枚に覆われるが、それも胸部が大きくはだけたビキニのようなもので、隠すべき場所だけが隠れているようなものである。そのビキニは一体型になるが、ハイレグの形に股部分を引き上げ、胸の下、腹部にハート型に穴を開けていた。さらに下は紫にコウモリのシルエットの入ったストッキングを履き、ふくらはぎまで伸びる黒いヒールブーツを履く。そんな色気を存分に出す彼女は、緑の長い髪から、また前頭辺りに小さなコウモリの羽根を生やしていた。

対して、紅い、同じような服を赤い色に変えて身に着ける少女のほうは胸が控えめであり、華奢な肢体が赤い色に映えているようだった。

「もう、意味がわかんないわよ……」

圧倒的な素早さに、エクレールは落胆したように肩を落とした。カズマは同時に、承太郎が一瞬にして移動したことに驚いており、承太郎は蜂の娘の敵意喪失と、上空の正体不明の二人から敵意が無い事を感じて、スタープラチナを引っ込めた。

そして次の瞬間、気がつくや遠くで空から光の柱が落ちてい

て——発砲音が一度だけ響き、上空で銃弾が飛んだ。

「ご、ごめんなさい！　ば、暴発してしまっ……」

「宮藤イ！　後で特訓三倍だっ！」

「当たり前ですわ豆狸。今ので誰かに当たったら、どうするつもりでしたの？」

「ごめんなさい！　本当にごめんなさいっ！」

銃弾は、上空でたむろする彼女等に当たるところか、方角も全く違う空へと飛んで姿を消した。だが危険だったことには変わりがなく、宮藤芳佳は今にも泣き出しそうに顔を真っ赤にして、何度もコウモリの羽を持つ彼女等へ頭を下げていた。

それをなだめるリーネに、被害者が居ないことに安心してから注意する坂本。便乗して宮藤を責めるペリーヌらに——カズマ達は当然として、

「ふふっ、なんだか面白くなってきたわねえ」

緑髪の女性がそう呟いて、どこかへと飛び去ってゆく。紅い翼を持つ少女は無言のままその場に居る全員に視線を向けてから、彼女の後を追っていった。

様々な”異端者”と短時間で遭遇したカズマは、その頭が沸騰してしまうほど混乱していた。

承太郎のスタンド、上条の超能力……は未だ見ていないが、エクレールの馬鹿力に、ギャラン・ドウのようなアルター単独で動く超生物。さらに、理解不明な人外の女性たちに、脚に機械をつけて空を飛び、頭に動物の耳を生じて銃や刀を持つ少女たち……。

これから自分は、ホーリーの支部へ向かい、あやせ達を救出することが出来るのか。いや、出来る。出来なくてもやる。が——非常に面倒な、遠回りになるかもしれない。

なにが起きてもそれを真っ向から叩き潰し粉砕するつもりのカズマは、流石に戦闘以外の事が多すぎて、早くもイヤになってきていた。どうせなら拳で勝敗を決めたい。仲間なんて要らないから、早くあやせ達を助けるか、強い奴と戦いたい。

。そんな思いとは裏腹に、カズマの非日常は長く続くらしかった――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3947m/>

とある右腕の特殊装甲

2010年10月8日12時22分発行